

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧

全国動物保健看護系大学協会
動物看護学モデル・コア・カリキュラム検討委員会

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧

近年、犬や猫などの家庭動物の飼育数が増加するとともに動物に対する福祉や愛護の意識が高まり、ヒトと同レベルの医療が動物にも求められるようになってきた。獣医療の高度化・多様化が進む中、獣医療提供者に対する社会的要請は質・量ともにますます高まっており、獣医師とともにこれに参画する、いわゆる動物看護師に求められる能力も向上が期待されている。このような社会的要請に応えるためには、獣医療業務を獣医師と動物看護師が連携して実施するいわゆるチーム医療体制を早急に確立し、獣医療の質の向上とともにその幅を広げる事が不可欠である。しかし医師の指示の下で医療に携わる医療技術職を数多く擁する人医療と異なり、獣医療では公的資格を有する補助職が存在しない。動物看護師の役割は非常に大きくかつ多岐にわたるため、獣医療の質を高めるためには動物看護師の知識・技術の向上が不可欠である。

このように獣医療における動物看護師の重要性が高まっているにもかかわらず、現在の動物看護学教育は決して十分ではない。教育機関によって教育時間および内容が高位平準化を満たすように要望されているが未だ満たされていないのが現状で、このままでは社会の要請に応える事は不可能である。この現状を顧み、我々は動物看護師の知識・技術の向上を目指して4年制大学による動物看護学教育を開始した。これらの大学の教育担当者によって構成される全国動物保健看護系大学協会にて検討を重ね、高位平準化された動物看護学教育の中心とすべく創案されたのがこの「動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧」である。

モデル・コア・カリキュラムの作成を目指したが、動物看護学に関する教育すべき明確な範囲、教育項目一覧が示されておらず、動物看護学コアカリキュラム策定の前段階である。このため、まず「動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧」を明確にすることとなった。この検討は、2008年には本格検討がなされた。2009年動物看護学会にて概要の報告を行い2009年末にはほぼ完成型に達した。2010年獣医学会（春）にて概要報告も行っている。その後新加盟校が増え、カリキュラム検討委員の合宿形式の検討会により細部の整合性が行われ完成した。「教育項目一覧」作成に当たり、「獣医師国家試験出題基準」「獣医学教育モデルコアカリキュラム」「医学教育モデルコアカリキュラム」「薬学教育モデルコアカリキュラム」などを参考とし、「保健師助産師看護師国家試験出題基準」「看護学教育の在り方に関する検討会報告書」を基本に獣医学領域でいかに導入できるかを勘案しながら作業を進めた。

この「教育項目一覧」は、高度な専門知識を持った動物看護の専門家として獣医師と共に獣医療を担うことが出来る人材の育成を目的としている。具体的には、小手先の技術の習得ではなく、獣医学とほぼ同等の基礎知識を学び、その知識に裏付けされた動物看護学ならびに動物看護技術を修得し、最終的には獲得した知識・技術を基に考え、行動することが出来る人材の育成を目指して編成されている。現在、人医の看護師教育では、学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標が明らかにされた。動物看護教育に鑑みると、このような実践能力をもち、獣医療という広範囲な職域の中で、獣医師の業務独占している業務以外の内容に従事しなければならない。

このような現状を踏まえ、動物看護教育の目的を達成するために、さまざまな専門職のカリキュラムを参考にしながら、動物看護師の養成に関する「動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧」を検討した。その結果、全体を3分野6章に分け、それぞれの章の内容を学ぶことにより、動物看護師に必要な知識・技術を段階的に修得出来るよう編成されている。まず専門基礎分野として、1. 動物の身体の構造と機能、2. 疾病の成り立ちと回復の促進、3. 動物と社会の関係の3つの章を立て、これらの章の中で解剖学、生理学、病理学、薬理学、微生物学など全ての基礎となる基礎獣医学、生命倫理、関連法規など動物看護学を学ぶ上での土台となる基礎知識を修得する。次の専門分野Ⅰは基礎動物看護学を学ぶ章立てとし、動物看護師として働く際の基本となる理念、技術、役割について理解するとともに、現在動物看護師の職務の中で大きな役割を占めている臨床検査についての知識・技術を修得する。最後の専門分野Ⅱは、1. 実践動物看護学、2. 動物のライフサイクルと看護の2つの章を立て、それまでに学んだ知識・技術を基に、症状別の看護、疾患別の看護、高齢動物学など、より実践的な動物看護の考え方、技術が修得出来るものとしている。

獣医療と携わるためには、チーム獣医療を実施していくためには、産業動物に関する知識も教育して行く必要があるが今回の「教育項目一覧」では伴侶動物に関する部分を多く含まれる。産業動物については共通部分で怠ることなく十分に教育されるべきであろう。

動物看護教育の「教育項目一覧」で制定されるのは初めてであり、今後の動物看護教育の改善充実と高位平準化に寄与できればと思う。今後のステップとしてこの教育項目を教育するための「動物看護学モデル・コア・カリキュラム」の制定および教科書の策定があり、早急に取りかかる必要がある。

平成 23 年 12 月 3 日

全国動物保健看護系大学協会

動物看護学モデル・コア・カリキュラム検討委員会

倉敷芸術科学大学

帝京科学大学

ヤマザキ学園大学

酪農学園大学

日本獣医生命科学大学

神田鉄平、前田憲孝

内藤順平、村上洋介、加隈良枝

二宮博義、本田三緒子、鈴木友子

加藤清雄、内田英二

石岡克己、松原孝子、梶ヶ谷博、左向敏紀（委員長）

動物看護学モデルコアカリキュラムの基準となる教育項目一覧 目次

	教育内容	ページ
1 基礎分野(教養科目を含む)	科学的思考の基盤	-
	動物、人間、社会の理解	-
2 専門基礎分野	動物の体の構造と機能	P. 6-16
	疾病の成り立ちと回復の促進	P. 17-22
	動物と社会の関係	P. 23-27
3 専門分野I	基礎動物看護学	P. 29-45
4 専門分野II	実践動物看護学	P. 47-53
	高齢動物の看護	P. 54

【専門基礎分野】

動物の体の構造と機能 (P. 6-16)

疾病の成り立ちと回復の促進 (P. 17-22)

動物と社会の関係 (P. 23-27)

動物看護学モデル・コア・カリキュラム
標準となる教育項目一覧

【動物の体の構造と機能】

動物看護師が対象とする動物は極めて高度に組織化され、複雑な機構を備えた生命体である。ここでは動物の生命維持の仕組みがどのようになっているかを形態学、生理学、行動学の面から以下の事柄について学び、生命体としての動物を理解するとともに病的状態の動物について学ぶ基盤を確立することを目標とする。1. 生命体の根底をなす細胞とそれが作る組織とは何か。2. まとまった機能を発現する器官系はどの様に働くのか。3. 個体としての動物の行動はどのような原理に基づくのか。

◎目標 1 : 生体がどのような構造をもち機能しているかについて学び、疾病時に起こる変化について理解を深める。

大項目	中項目	小項目
1. 生命のすがた	A. 個体の成り立ち	物質と生命
		細胞から器官へ
	B. 細胞	細胞の構造と細胞内小器官
		細胞分裂と染色体
		DNA から蛋白質へ
	C. 組織	上皮組織と腺組織
		支持組織
		筋組織
		神経組織
	D. 器官	器官の成り立ち
		生命維持システム (植物機能)
		運動・調節システム (動物機能)
	E. 体液	細胞内液と細胞外液
		体液の化学組成

2. 血液と造血器	A. 血液・造血器の構造と機能	血液の成り立ち
		血漿の成分
		赤血球のはたらき
		白血球のはたらき
		造血のしくみ
	B. 止血機構	血小板のはたらき（一次止血）
		血液凝固（二次止血）
		線維素溶解系（三次止血）
3. 生体の防御機構	A. 外皮の構造と機能	皮膚の構造と機能
		角質器（被毛、肉球、爪）、皮膚腺、乳腺
		外皮の比較形態学（羽毛、鱗）
		生体表面での防御機構（外皮、粘膜、漿膜）
	B. 免疫系のしくみ	免疫器官（骨髄、胸腺・リンパ節、ファブリキウス嚢、脾臓、扁桃、パイエル板）と免疫担当細胞
		自然免疫と獲得免疫
		体液性免疫と抗原抗体反応（抗原提示細胞、IgG、IgM...）
		細胞性免疫（ウイルス感染細胞や腫瘍の除去）
		免疫寛容と自己免疫
	C. 体温調節	熱産生と熱放散
		体温調節中枢
		発熱

4. 脳と神経	A. 神経組織	神経細胞の機能
		活動電位と情報伝達
	B. 中枢神経系の構造と機能	大脳（新皮質、辺縁系）
		小脳
		脳幹（中脳、間脳、橋、延髄）
		脊髄
		中枢神経系を保護する組織（髄膜）
		脳室と脳脊髄液（CSF）
		睡眠と覚醒
	C. 末梢神経系の構造と機能	脊髄神経と神経叢
		体性神経（知覚神経、運動神経）
		自律神経（交感神経、副交感神経）
		脳神経（12対）
		脊髄反射

動物看護学モデル・コア・カリキュラム教育項目一覧

5. 感覚と情報伝達	A. 視覚	眼球・眼球付属器の構造と機能
		視覚
	B. 聴覚と平衡覚	耳の構造
		聴覚
		平衡覚
	C. 嗅覚と味覚	嗅球の構造と嗅覚
		味蕾の構造と味覚
	D. 皮膚感覚	皮膚感覚の種類
		皮膚の感覚受容器
	E. 疼痛感覚	体性痛と内臓痛
侵害受容器と痛みの伝達機構		
6. からだの支持と運動	A. 骨と関節	骨の構造と分類
		骨の発生と成長
		関節の構造と分類
		骨、関節、骨格筋の連携による運動の仕組み
	B. 骨格筋と運動	筋肉の構造と種類（横紋筋と平滑筋、随意筋と不随意筋）
		筋収縮の機構
		神経筋伝達
	C. 各部位の運動器	頭部の運動器（頭蓋、咀嚼筋、眼球の運動）
		体幹の構造（椎骨、椎間板）
		四肢の運動器（骨、関節、主な筋肉）
		膝関節の構造（膝蓋骨、十字靭帯、半月板）

7. 血液循環とその調節	A. 心臓	心臓の構造	
		心筋の性質	
		心臓の電気的活動と刺激伝導系	
		ポンプとしての心臓の機能	
	B. 血管系	体循環と肺循環（動脈血、静脈血）	
		血管系の構造と機能	
		毛細血管における物質交換	
		血圧の調節機構	
		循環器の発生と胎仔循環	
	C. リンパ系	リンパ管とリンパ節	
	8. 呼吸とその調節	A. 呼吸器の構造と機能	上部気道の構造（外鼻、鼻腔、副鼻腔、喉頭、気管）
			気管支、肺の構造と機能
B. 肺でのガス交換		外呼吸と内呼吸	
		ガス分圧	
		酸素と二酸化炭素の運搬	
C. 呼吸の調節		呼吸運動（肋間筋と横隔膜の働き、換気量）	
		呼吸中枢による調節	
		呼吸に影響を与える因子	
		酸塩基平衡の調節機構	
D. 呼吸の比較生理学		鳥類の呼吸（気嚢の役割、直行流交換系）	

9. 内分泌とホルモン	A. ホルモンの種類と分泌調節	内分泌と外分泌
		ホルモンの化学的性質と作用機序
		ホルモンの合成・分泌
		フィードバック機構
	B. 内分泌器官の構造とホルモンの機能	膵島と膵島ホルモン（グルカゴン、インスリン）
		視床下部による調節機構
		甲状腺と甲状腺ホルモン（T4, T3）
		下垂体と下垂体ホルモン（神経下垂体、腺下垂体）
		副腎皮質（コルチゾル、アルドステロン）
		上皮小体とカルシウム代謝（ビタミンD、パラソルモン、カルシトニン）
		副腎髄質
		消化管ホルモン
		その他の内分泌腺（心臓、腎臓、脂肪組織...）

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの教育項目一覧

10. 消化吸収と栄養代謝	A. 栄養素	炭水化物（糖、デンプン、食物繊維）
		脂質（中性脂肪、脂肪酸、必須脂肪酸、エイコサノイド、コレステロール）
		蛋白質（必須アミノ酸、蛋白質の機能）
		ビタミン（種類と作用、過剰症と欠乏症）
		ミネラル（種類と作用、過剰症と欠乏症）
		水
	B. 摂食行動	満腹中枢と摂食中枢
		末梢からの情報
	C. 咀嚼	歯・口腔の構造と機能
		咀嚼の過程
	D. 嚥下	咽頭の構造と機能
		食道の構造と機能
	E. 消化と吸収	胃の構造と機能
		小腸（十二指腸、空腸、回腸）の構造と機能
		膵臓の構造と機能
		栄養素の消化と吸収
		結腸の構造と機能
		直腸・肛門の構造と機能

10. 消化吸収と栄養代謝（続き）	F. 代謝	同化と異化
		酵素反応
		基礎代謝とエネルギー要求量
		炭水化物の代謝（解糖、TCA 回路、電子伝達系）
		脂肪の代謝（ β 酸化、脂肪細胞の機能）
		リポ蛋白の機能
		蛋白質の代謝
		核酸の代謝
	G. 肝臓のはたらき	胆汁生成と胆道の機能
		栄養代謝の調節（グリコーゲン代謝、糖新生、窒素代謝）
		解毒機能（グルクロン酸包合、硫酸包合）
		蛋白質の合成（アルブミン、凝固因子、急性期蛋白...）
	H. 栄養代謝の比較生理学	草食動物の消化器と栄養代謝
		鳥類の消化器

動物看護学モデル・コア・カリキュラム

11. 体液調節と尿の生成	A. 尿の生成	腎臓の構造
		糸球体濾過と原尿の生成
		再吸収と分泌
		窒素代謝の比較生理学
	B. 細胞外液の調節	抗利尿ホルモンの作用
		レニン-アンギオテンシン-アルドステロン系
	C. 下部尿路系と排尿	膀胱と尿道の構造
排尿反射		
12. 性と生殖	A. 雌性生殖器	雌性生殖器の構造（卵巣、卵管、子宮、膣、外陰部...）
		雌の繁殖機能の発達（性成熟、避妊）
	B. 雄性生殖器	雄性生殖器の構造（精巣、前立腺、尿道球腺、陰茎...）
		雄の繁殖機能の発達（精巣下降、性成熟、精子形成、去勢）
	C. 性周期と生殖のメカニズム	性ホルモンの機能と性行動
		交配適期と交尾
	D. 妊娠と出産	受胎と妊娠
		分娩と産褥
	E. 動物の発生と遺伝	染色体と遺伝子
		発生のメカニズム
	F. その他の動物の繁殖	他の哺乳類（フェレット、ウサギ、齧歯類）の繁殖学
		鳥類の繁殖学（巣引き）

◎目標2：動物の行動の科学的基盤を理解し、問題行動についての考え方を習得する

大項目	中項目	小項目
1. 行動の意義と機構	A. 行動の進化	動物行動学の基本概念（行動の解釈、適応）
		種特有の行動様式
		家畜化
	B. 行動の種類	個体維持行動（摂食、飲水、身づくろい、護身行動）
		社会行動（集団形成、性行動、母性行動、親和行動、闘争行動、遊び）
		生得的行動と学習行動
		異常行動
	C. 行動発現のしくみ	脳による行動の制御
		行動の動機づけと情動の発現
		行動に影響を与える生理活性物質（神経伝達物質、ホルモン、フェロモン）
		行動に影響を与える環境要因（温度、季節）
	D. 個体における行動の変化	胎生期
		新生子期
		移行期
		社会化期
		若年期
		成熟期
高齢期		

1. 行動の意義と機構（続き）	E. 学習理論	馴化と感作
		古典的条件づけ
		オペラント条件づけ
		報酬と罰
		強化と消去
		行動形成
		学習に影響を与える因子
2. 犬と猫の問題行動	A. 問題行動の成り立ち	問題行動の定義
		問題行動の要因（生得的要因、環境要因）
		品種特性、個性
	B. 問題行動の修正	問題行動の治療
		行動修正法
		環境修正法
		薬物療法
		外科的処置
	C. 主な問題行動の理解と対処	攻撃行動の種類、原因と対処
		恐怖・不安の原因と対処
		不適切な排泄行動の原因と対処
		老齢性認知障害の原因と対処
	D. 問題行動の予防	社会化、子イヌ・子ネコ向け社会化教室の実施
		基礎トレーニング
		飼い主教育

【疾病の成り立ちと回復の促進】

看護臨床の基礎分野である「疾病の成り立ちと回復の促進」では、疾病動物の回復を促して日常生活の質を高めるために必要な看護の対象となる病気について理解を深める。動物体の基本的な構造と機能を基に、動物が外界から受ける様々な刺激や侵襲、そして病原体の感染などに対する動物の反応を知ることは、疾病動物に対する看護の役割を理解する上で重要である。その目的を達成するために、目標を次の3段階に分けて設定した。目標1では、疾病の成り立ちの基礎となる生体反応と疾病の機序を、目標2では病原体が動物個体に感染する経路や発病機序を、目標3では治療に用いる薬物の種類と作用機序をそれぞれ解説した。

◎目標1：さまざまな疾病がもたらす身体内部の変化について学び、病的状態を理解するための基盤を修得する。

大項目	中項目	小項目
1. 疾病の成り立ち	A. 生体反応と疾病の機序	疾病をおこす内因、外因
		バイタルサインの変化
	B. 生体の回復力	ホメオスタシス
		回復力に影響する局所的・全身的因子 生活環境調整
2. 体に生じる病的変化	A. 細胞や組織に生じる変化	炎症
		変性
		壊死
		アポトーシス
		萎縮
		肥大と過形成
		物質沈着
	B. 先天異常	遺伝子異常
		染色体異常
		胎子が受ける障害

2. 体に生じる病的変化（続き）	C. 循環障害	充血とうっ血
		虚血と梗塞
		浮腫と胸腹水
		出血
		ショック
		血栓症
		播種性血管内凝固（DIC）
	D. 免疫異常	アレルギーの分類（I-V 型）
		自己免疫反応
		移植と拒絶
	E. 腫瘍	定義と分類
		発生機序
		生体への侵襲
		転移と進行
	F. 損傷	創傷の種類
		治癒機転
		創傷治癒に影響する因子
		病的損傷（壊死、壊疽、潰瘍、瘻、びらん、穿孔）

◎目標2：微生物や寄生虫の感染予防について理解を深め、環境衛生を含めた公衆衛生の考え方を修得する。

大項目	中項目	小項目
1. 病原体と感染症	A. 病原体の種類と特徴	細菌（リケッチア・クラミジア含む）
		ウイルス
		真菌
		プリオン
		寄生虫
		衛生動物
	B. 感染の成り立ち	病原体の進入門戸
		飛沫感染
		接触感染
		媒介動物（ベクター）による感染
		病原体の排出と二次感染
		水平伝播と垂直伝播
		キャリアと感染巣（レゼルポア）
		自然宿主と終末宿主
	C. 発病機序と診断・治療	微生物の病原性
		顕性感染と不顕性感染
		日和見感染（自発性感染）
		遅発性感染
		菌血症・ウイルス血症と敗血症
		微生物・寄生虫検査法
		化学療法と薬剤耐性菌
	予防とワクチン	

	D. 主な動物感染症	細菌性疾患
		ウィルス性疾患
		真菌症
		寄生虫疾患
		ヒトと動物の共通感染症
2. 公衆衛生学	A. 獣医療と公衆衛生	公衆衛生分野における獣医療の役割
		公衆衛生の考え方と国民衛生の動向
		公衆衛生行政
	B. 疫学と疾病予防	疫学の概要
		疾病・健康障害の発生要因
		疫学調査の方法論
		予防疫学
		ズーノーシス
		食品衛生と食中毒
	C. 環境衛生	生活環境問題
		水環境（上水・下水・水質汚濁）
		騒音
		臭気
		化学物質
		シックハウス症候群

◎目標3：臨床現場で使われる薬物の作用機序と副作用、使ってはいけない状況等についての基本知識を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 動物看護における薬の利用	A. 動物看護師による薬物の取り扱い	薬物治療の目的
		薬の管理と使用
		新薬の開発と治験
	B. 動物薬理学の基礎	薬理作用の機序
		薬剤の形状と投薬法
		薬物動態と半減期
		薬効に影響する因子
	薬物の有害作用	
2. 動物病院で使用する主な薬物	A. 神経に作用する薬物	麻酔薬
		鎮静薬と鎮痛薬
		筋弛緩薬
		抗けいれん薬
		行動異常に使われる薬
	B. 呼吸器に作用する薬物	鎮咳薬
		気管支拡張薬
		呼吸興奮薬
	C. 循環器・泌尿器に作用する薬物	降圧薬
		強心薬
		抗不整脈薬
		利尿薬
		抗利尿薬

2. 動物病院で使用する主な薬物 (続き)	D. 消化器に作用する薬物	制吐薬と胃粘膜保護薬
		消化管運動促進薬
		止瀉薬
		瀉下薬
		肝疾患に用いる薬物
	E. 代謝・内分泌系の薬物	糖尿病治療薬
		甲状腺治療薬
		ステロイドホルモン製剤
		脂質代謝改善薬
		骨代謝関連薬
		オータコイド
	F. 血液・免疫系に作用する薬物	貧血治療薬
		抗凝固薬
		止血薬
		抗炎症薬
		免疫抑制薬
	G. 化学療法薬	抗菌薬
		駆虫薬
		殺虫薬
		抗腫瘍薬

【動物と社会の関係】

動物と人間社会の関係は近年ますます多様化し、深みを増しつつある。ここでは動物と人間社会の関係を幅広く理解し、動物看護師が果たすべき役割を認識するために2つの目標を設定する。目標1では獣医療機関における動物看護師の職務と関係法規について、目標2では人間社会に関わりの深いさまざまな動物種の特徴について深く学習する。

◎目標1：獣医療機関における動物看護師の職務と関係法規について学ぶ。

大項目	中項目	小項目
1. 獣医療体制と動物看護師の役割	A. 看護活動の場	獣医療施設における看護活動
		地域における看護活動(学校飼育動物等)
	B. 獣医療提供体制	獣医療施設の機能
		救急獣医療の充実
		診療記録・情報公開
		医薬品と医療器具の取り扱い
		毒薬・劇薬の取り扱い
		廃棄物の取り扱い
	C. 他職種との連携	獣医療に携わる関連職種
		他職種との連携
		獣医療過誤
	D. 動物看護職の社会的立場	動物看護職の社会的地位
		動物看護職の労働安全衛生
		国際協力

2. 動物看護職と関係法規	A. 獣医事関連諸法規	獣医師法
		獣医療法
		動物の愛護及び管理に関する法律
		愛がん動物用飼料の安全性の確保に関する法律（ペットフード安全法）
		薬事法
		毒物及び劇物取締法
		麻薬及び向精神薬取締法
		覚せい剤取締法
	B. 公衆衛生関連諸法規	家畜伝染病予防法
		感染症法
		狂犬病予防法
		身体障害者補助犬法
		鳥獣保護法
		種の保存法
		外来生物に関する法律
廃棄物の処理及び清掃に関する法律		

3. 人と動物の関係	A. 動物福祉	伴侶動物の飼育状況
		適正飼育
		動物愛護活動
	B. 人と動物の協働	動物介在教育
		動物介在活動
		動物介在療法
		使役動物
	C. 動物飼育と人の健康	動物が人の健康に及ぼす影響
		動物に関連した怪我や事故の防止
		ペットロス
		動物虐待
		ペットへの依存

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基盤となる教育項目一覧

◎目標3：人間の生活に密接に関わっている個々の動物について理解を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 伴侶動物	A. 伴侶としての動物	歴史
		飼育の現状
		伴侶動物の活用
		伴侶動物の福祉
	B. 種・品種と特徴	犬、猫、フェレット、ウサギ、げっ歯類、馬、飼鳥、爬虫類、その他
	C. 飼育管理	ライフサイクル
		飼養設備と管理
食性と飼料		
2. 産業動物	A. 食物源としての動物	歴史
		飼育の現状
		畜産物の生産と流通
		産業動物の福祉
	B. 種・品種と特徴	牛、馬、豚、羊、山羊、鶏
	C. 飼育管理	ライフサイクル
		飼養設備と管理
		食性と飼料

3. 実験動物	A. 試験研究のための動物	歴史
		飼育の現状
		動物実験の必要性
		実験動物の福祉（3R）と動物実験代替法
	B. 種・品種と特徴	マウス、ラット、モルモット、ハムスター、スナネズミ、ウサギ、イヌ、ネコ、ブタ、サル
		遺伝学的制御
		微生物学的制御
	C. 飼育管理	ライフサイクル
		飼養設備と管理
		食性と飼料

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの標準となる教育科目一覧

【専門分野 I】

基礎動物看護学 (P. 29-45)

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基となる教育項目一覧

【基礎動物看護学】

「基礎動物看護学」では実践的な看護学を学ぶ前に、動物看護技術師として基本となる理念、技術、役割について十分に理解しておくことは重要である。このことを達成するため3つの目標を設定する。目標1として看護の基本的概念と看護の展開を、目標2では看護に共通する基本技術、日常生活の支援技術、診療に伴う基本的技術を、目標3では動物看護の発展的役割について学ぶ。

◎目標1：看護の基本となる概念についての理解を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 看護の基本となる概念	A. 看護の本質	対象
		役割
		機能
	B. 看護の対象としての動物	動物のとらえ方
		動物と環境
	C. 動物の健康と生活	健康のとらえ方
		健康に影響を与えるもの
		生活の要素と健康とのかかわり（食、排泄、清潔、活動・運動、睡眠、性、学習・遊び、QOL<クオリティ・オブ・ライフ>）
	D. 動物看護倫理	職業倫理・看護師の義務
		動物看護師の倫理規定
		動物の所有者の権利
		動物の生命倫理
		安楽死
		インフォームド・コンセント

2. 看護過程の展開	A. 看護過程の理解	看護過程の活用
		看護過程の有用性
	B. 看護過程の構成要素	アセスメント（情報収集と分析）
		看護上の問題点（看護診断）
		看護計画（看護目標と具体策の立案）
		実施
	評価	
3. 動物看護学の成立と特徴	A. 動物看護研究	看護学・動物看護学の歴史
		ヒト医療との比較（医師法・保健師助産師看護師法）
		動物看護研究・基礎的技術
		看護実践と研究
		研究成果と活用する方法

動物看護学モデル・コア・カリキュ

◎目標2：動物の飼養と、疾病予防を含めた健康管理についての理解を問う

大項目	中項目	小項目
1. 健康の保持	A. 健康管理と病気の予防	散歩・運動
		休息・遊び
		排尿・排便
		グルーミング
		栄養管理
		ワクチネーション
	B. 環境条件	住居的要因
		栄養的要因
		気候的要因
		物理化学的要因
		生物的要因
	入院室、ケージの整備	
2. 衛生・安全管理	A. 感染を予防するための技術	感染症の成立
		洗浄
		消毒
		滅菌
		検疫
		隔離

2. 衛生・安全管理（続き）	B. 安全を守るための技術	感染コントロール（無菌操作、手洗い、感染症の取り扱い）
		手術に関わる無菌処置、消毒
		外傷処置に関わる消毒
		安全管理対策（システム、機器点検、入院ケージ）
		誤投薬・誤認の防止、転落、窒息等の事故の防止
		外科関連機器の取り扱い
3. 食生活の援助技術	A. 犬・猫の基礎栄養	食性、摂食行動、嗜好性、異嗜、摂食量、飲水量
		ライフステージと栄養管理
		繁殖期、妊娠期、授乳期の栄養管理
		肥満と栄養管理、食物繊維の作用
		中毒物、与えてはいけないもの
	B. 栄養評価法	エネルギー要求量（RER、MER）
		AAFCOの栄養プロファイル
		栄養状態の評価（体重、BCS、体脂肪測定、血液検査）
	C. フード	歴史、種類
		原料、製造方法
		栄養基準、表示、法令、品質、試験方法
		手作り食
		サプリメント
	D. 栄養指導	BCSの取り方、体重測定方法
		エネルギー要求量の計算方法
		食品の成分
フードの選び方、与え方、効用、保存方法		

4. 疾病と栄養管理	A. 病気と栄養の関係	循環器疾患
		消化機疾患（下痢、嘔吐、膵臓、肝臓を含む）
		腎疾患
		尿石症、ネコの下部尿路疾患（FLUTD）
		糖尿病
		皮膚と被毛、食物アレルギー性疾患
		歯科疾患
	B. 栄養管理	摂食と問題行動、異常行動
		経腸栄養法
		非経腸栄養法
		食事管理失宜による疾病、リフィーディング
		入院時の栄養管理

動物看護学モデル・コア・カリキュラム

◎目標3：臨床検査の原理・目的と実施方法の理解を問う

大項目	中項目	小項目
1. 検査看護の基礎	A. 検査における動物看護師の役割	臨床検査の目的
		獣医師との連携
		プライバシーの保護
		検査時の飼い主への接し方
	B. 検査データの読み方	基準値
		感度と特異度
2. 検体検査	A. 検査機器の取り扱い	顕微鏡の扱い方
		遠心分離器の扱い方
	B. 血液検査	採血方法
		血液検体の取り扱い
		塗抹標本の作製
		血球像の観察
		全血球計算値 (CBC)
		ヘマトクリット管による検査
		凝固検査
		血液化学検査(生化学検査)
		血液ガス
		免疫学的検査
		内分泌検査

2. 検体検査（続き）	C. 尿検査	採尿法
		一般性状
		比重
		化学的性状の検査
		尿沈渣
	D. 糞便検査	一般性状
		虫卵検査
		消化試験
		細菌の観察
	E. 細胞診と病理組織検査	検体の採取と処理
		染色と鏡検
		胸腹水・髄液の検査
	F. 遺伝子検査	検体採取と取り扱い
リンパ球のモノクローナリティ		
遺伝病の検査		
3. 生体検査	A. 心電図	心電計の種類
		端子の装着と検査手順
		波形の描出
		心音図
	B. 血圧測定	血圧計の原理
		測定手順

3. 生体検査（続き）	C. X線検査	X線撮影の原理
		撮影条件とフィルム
		撮像の基本
		造影法
		現像
		デジタルX線装置（CR）
		被曝と放射線防護
	D. 超音波検査	超音波検査の原理
		さまざまな描出法
		心エコー検査
		腹部エコー検査
		造影検査
	E. 内視鏡検査	内視鏡の構造
		検査前の準備
		検査手順
		鉗子による生検
	F. その他の画像検査	スコープの洗浄/消毒
		コンピュータ断層撮影法（CT）
		磁気共鳴画像法（MRI）
		ポジトロン断層撮影法（PET）
G. 神経学的検査	シンチグラフィ	
	姿勢反応と脊髄反射	
		脳神経の検査

3. 生体検査（続き）	H. 眼科検査	シルマー試験
		フルオレセイン試験
		眼圧測定
		スリットランプ検査
		眼底検査
	I. 耳の検査	耳道の観察
		耳垢検査
	J. 皮膚検査	搔爬試験（スクレーピング）
		スタンプ検査
		被毛検査
		ウッド灯
		真菌培養
		パンチ生検
		皮内反応

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧

◎目標4：基本的看護技術についての理解を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 共通基本技術	A. 対人関係の技術	人間関係を成立し発展させるための技術
		人間の成長を促すための技術
		職場におけるコミュニケーションへの関与
		飼い主及び顧客への伴侶（家庭）動物に関する情報提供技術（しつけ、グルーミング、繁殖、動物関連製品、サービス等）
		グリーフマネジメント（ペットロス・安楽死等）
		接遇マナースキル
		在宅治療（往診）における対応
		動物医療保険の対応
	B. 対動物関係の技術	動物種ごとのコミュニケーション
		安全な散歩・運動技術
		ハンドリングと保定法
		基本保定法
		動物の状態に合わせた保定法
		動物種に合わせた保定法
		処置及び検査に合わせた保定法
	C. 動物および飼い主との信頼関係を確立し発展させるための技術	コミュニケーション技術
		カウンセリング技術
	D. 安楽を確保する技術	安楽な姿勢，罨法

1. 共通基本技術（続き）	E. 観察技術	身体面のアセスメント（フィジカルアセスメント：体温、脈拍、血圧、呼吸、意識、身体計測、全身の外観、体重、BSC、体表リンパ節、CRTとPFA、粘膜色） 心理・行動面のアセスメント（不安、恐怖）
	F. 記録・報告	記録・報告の技術
		記録の種類（POSを含む） 記録・報告の条件（情報開示を含む）
2. 基本的日常生活援助技術	A. 環境を整える技術	環境の調整（温度、湿度、照度、騒音、換気、採光、臭気、プライバシー保護）
		入院室、ケージの整備
	B. 食生活の援助技術	健康な食生活
		栄養状態の評価
		摂食行動のアセスメントと援助方法
		栄養管理の基礎
		栄養の補給法（経管栄養法、経静脈栄養法）
	C. 排泄の援助技術	排泄行動のアセスメントと援助方法
		排泄物の観察
		自然な排泄を促す援助方法
		浣腸
		導尿
		外科的排泄障害
	D. 身体の清潔の援助技術	清潔行動のアセスメントと援助方法
		身体各部の清潔の援助方法（シャンプー、基本的グルーミング（耳掃除、爪きり、肛門嚢処置）、清拭、口腔内清潔）
		褥創の予防、処置
	E. 休息・睡眠の援助技術	休息・睡眠状態のアセスメントと援助方法
		安楽な休息・睡眠を促す援助方法

3. 診療に伴う技術	A. 診療記録	診察記録
		検査記録
		看護記録
		保管義務
	B. 診察補助	診察時における動物看護師の役割
		対象動物の心理
		飼い主の心理
		診察に必要な器具類の準備
	C. 器具及び機器	注射器及び特殊機器の取扱い方法とメンテナンス
	D. 侵襲的処置の介助技術	治療・処置時における動物看護師の役割と責任
		治療・処置時の対象動物
		穿刺、洗浄、吸引
		酸素吸入
		包帯法と創傷・褥瘡の管理
		カテーテル挿入
		化学療法
		強制給餌とチューブフィーディング
	E. 与薬の援助技術	薬剤の取り扱い
		薬剤の作用・投与量・投与方法
		投与方法
副作用とその徴候・禁忌		

3. 診療に伴う技術（続き）	F. 麻酔・鎮静処置に関わる技術	処置時における動物看護師の役割と責任
		適応とリスク
		特有の問診
		処置前の検査
		注射麻酔・鎮静に関わる手技（局所麻酔含む）
		吸入麻酔に関わる手技
		導入時・覚醒時のリスクと対処
		生体監視項目（心拍数・呼吸数・体温・血圧・麻酔濃度・酸素飽和度・二酸化炭素濃度等）の意義
		麻酔・鎮静記録
	G. 輸液に関わる技術	処置時における動物看護師の役割と責任
		適応とリスク
		輸液計画
		輸液剤
		輸液に関わる手技
		輸液処置中のモニタリング
	H. 輸血に関わる技術	処置時における動物看護師の役割と責任
		適応とリスク
		クロスマッチ試験と血液型
		輸血計画
		輸血製剤
		輸血に関わる手技
輸血による副反応		

3. 診療に伴う技術（続き）	I. 救命救急処置技術	生命徴候のアセスメントと救命方法
		呼吸を楽にする姿勢
		循環管理
		保温
		止血法
		気管内挿管
		心肺蘇生法
	J. 死の看取りの技術	危篤時のケア
		死亡時のケア

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧

◎目標5：動物の外科看護技術についての理解を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 外科に伴う技術	A. 外科看護	外科看護の基本
		創傷
		ドレーンの装着法及び管理
		骨折の管理
	B. 手術チームの準備	徹底的な手洗
		手術着の着用
		手術用手袋の着用
	C. 術前処置	入院動物の状態確認
		手術直前準備
		皮膚の前処理
		眼及び粘膜の準備
		手術のための動物のポジショニング
	D. 手術助手	ドレーピング
		手洗助手と外回り助手のガイドライン 器具台の準備
	E. 縫合	縫合材の分類
		一般的な縫合材
		縫合系の代替品（ステープル、組織接着剤、接着テープ等）
		縫合系の選択
		縫合針
	縫合パターン	

1. 外科に伴う技術（続き）	F. 外科器具	外科器具の手入れと維持管理
		一般的な手術器具
		整形外科器具
		骨折整復用の器具
		手術用器具セットの包装
		器具セット
		吸引装置
	G. 創傷管理の援助技術	創傷管理の基礎知識
		創傷処置
		褥創の予防、処置
	H. 活動・運動の援助技術	活動・運動の能力のアセスメントと 援助方法
		体位変換
		リハビリテーションと理学療法

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧

◎目標6：さまざまな動物看護活動の場についての理解や、他職種との関連において動物看護の果たす役割についての理解を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 看護の役割と機能を支えるしくみ	A. 継続看護	施設内から在宅への継続
		退院計画および退院指導
		経時的変化に対する継続看護
	B. 看護管理	看護提供システム(チームナーシング、プライマリナーシング、機能別看護)
		クリティカルパス
		リーダーシップとメンバーシップ
		事故管理・防止システム
	C. 専門職能団体の活動	専門職集団としての役割と機能

動物看護学モデル・コア・カリキュラム

【専門分野Ⅱ】

実践動物看護学 (P. 47-53)

高齢動物の看護 (P. 54)

動物看護学モデル・コア・カリキュラムの構築となる教育項目一覧

【実践動物看護学】

臨床分野である実践看護学では、臨床現場で要求される動物看護対象動物に対して、実践的な看護の考え方や技術を習得すること目的として編成され、その目標達成のために次のような2段階の目標が設定されている。目標1では、動物の健康状態を、健康時、急性期、慢性期および終末期の4病態に区分して、それぞれの健康レベルに応じて必要とされる様々な診断・検査の補助ならびに具体的な看護技術について理解する。また、周術期の看護の特性と症状別の看護の特性を理解し、具体的な看護援助を理解する。目標2では、身体の機能障害を持つ動物看護の実践に関する基礎知識と具体的な援助を学び、アセスメント能力を身につけ、動物看護過程を展開できる能力を習得する。

◎目標1：動物の健康レベルに応じた看護実践についての理解を問う。

大項目	中項目	小項目
1. 健康の保持・増進、疾病の予防に向けた看護	A. 疾病の予防	定期健康診断のすすめと飼い主への支援
		ストレス状況と要因のアセスメント
		ストレスの緩和、解決方法の指導
2. 経過に基づく動物看護	A. 急性の経過をたどる動物看護	急性期の治療の特徴と患者動物のニーズ
		急性期にある患者動物への援助
	B. 慢性の経過をたどる動物看護	慢性期の治療の特徴と患者動物のニーズ
		慢性期にある患者動物への援助
	C. 障害に対する適応への動物看護	機能障害と日常生活動作の制限
		飼い主の生活と介護負担への支援
		リハビリテーション動物看護
	D. 終末期にある動物看護	終末期の治療の特徴と患者動物のニーズ
		慢性期にある患者動物への援助
		終末期から死後の処置
		悲嘆する飼い主への理解

3. 周術期の看護	A. 術前看護	術前に必要なアセスメント	
		合併症の予防処置と援助	
		飼育者への援助	
	B. 術中看護	術中に必要なアセスメント	
	C. 術後看護	術後に必要なアセスメント	
		疼痛・苦痛の緩和	
		術後合併症の予防	
		術後の生活と機能障害への援助および飼い主の援助	
	4. 症状別の看護	A. 痛み	考えられる原因と観察・アセスメント
			おもな看護援助
B. 摂食異常（食欲不振・多食）		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	
C. 多飲・多尿		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	
D. 嘔吐		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	
E. 呼吸異常・咳		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	
F. 意識異常（嗜眠・虚脱）		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	
G. 発作・痙攣		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	
H. 運動異常（麻痺・は行）		考えられる原因と観察・アセスメント	
		おもな看護援助	

4. 症状別の看護（続き）	A. 排尿異常	考えられる原因と観察・アセスメント
		おもな看護援助
	B. 排便異常（下痢）	考えられる原因と観察・アセスメント
		おもな看護援助
	C. かゆみ	考えられる原因と観察・アセスメント
		おもな看護援助
	D. 脱毛	考えられる原因と観察・アセスメント
		おもな看護援助
	E. 体型異常（肥満・消瘦）	考えられる原因と観察・アセスメント
		おもな看護援助
	F. その他の身体的な異常	考えられる原因と観察・アセスメント
		おもな看護援助

動物看護学モデル・コア・カリキュラム

◎目標2：機能障害をもつ動物への看護実践について問う。

大項目	中項目	小項目
1. 呼吸機能障害を持つ動物の看護	A. 呼吸機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 呼吸機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		呼吸機能障害を持つ患者動物への看護過程の展開
2. 循環機能障害を持つ動物の看護	A. 循環機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 循環機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		循環機能障害を持つ患者動物への看護過程の展開
3. 栄養摂取・代謝機能障害を持つ動物の看護	A. 栄養摂取・代謝機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 栄養摂取・代謝機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		栄養摂取・代謝機能障害を持つ患者動物への看護過程の展開

4. 内部環境調節障害を持つ動物の看護	A. 内部環境調節の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 内部環境調節障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		内部環境調節障害を持つ患者動物への看護過程の展開
5. 生体防衛機能の障害を持つ動物の看護	A. 生体防衛機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 生体防衛機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		生体防衛機能の障害を持つ患者動物への看護過程の展開
6. 感覚機能の障害を持つ動物の看護	A. 感覚機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 感覚機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		感覚機能の障害を持つ患者動物への看護過程の展開

7. 神経・運動機能の障害を持つ動物の看護	A. 神経・運動機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 神経・運動機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		神経・運動機能の障害を持つ患者動物への看護過程の展開
8. 排泄機能の障害を持つ動物の看護	A. 排泄機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 排泄機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		排泄機能の障害を持つ患者動物への看護過程の展開
9. 繁殖障害を持つ動物の看護	A. 繁殖機能の障害	症状とその病態生理
		検査と治療と処置
		疾患の理解
	B. 繁殖機能障害の患者動物の看護	症状に対する看護援助
		検査・処置・治療を受ける患者動物への援助
		疾患を持つ患者動物への援助
		繁殖障害を持つ患者動物への看護過程の展開

10. 担がん動物の看護	A. 疾患の理解	がんの成り立ち
		TNM 分類・臨床ステージ
		検査と治療と処置
		がん性疼痛
		がん性悪液質
	B. 治療法の理解	根治療法・緩和療法・支持療法・安楽死
		手術療法・化学療法・放射療法・その他の療法
		化学療法の理解
	C. 疾患の看護	治療を受ける患者動物への援助
		がんをもつ動物の栄養管理
		がん性疼痛への援助
		がん患者動物への看護過程の展開

動物看護学モデル・コア・カリキュラム教育項目一覧

【高齢動物の看護】

ここでは、誕生から加齢をかさねて生命を全うするまでのライフサイクルにおいて、特に高齢期に要求される看護技術を習得することを目標として、これらの課題に対して集中的に編成されている。

◎目標 1：高齢動物の特徴を理解し、高齢期の対象特性、健康特性を統合させた動物看護を学ぶ。

大項目	中項目	小項目
1. 高齢動物看護学の基本的考え方	A. 高齢期動物の特徴	高齢動物の身体の変齢変化
		安全な生活環境への支援
		健康の保持増進と予防活動の重視
	B. 高齢動物看護の特徴	死にいたるプロセス
		継続ケアと在宅生活への看護
		家族との協働と家族看護
		加齢変化の正常と異常
		生活障害の程度と範囲
		身体徴候
		2. 高齢動物看護の基礎的技術
生活障害の程度と範囲		
身体徴候		
3. 高齢動物の健康を支える看護	A. 健康生活の維持	加齢に伴う身体的徴候と看護
		飼育環境
		高齢動物の運動器疾患
		排泄のコントロールの障害
		長期横臥状態・廃用性症候群
		認知障害